

## アフターコロナへの視点

インバウンドの  
地方誘致の要に

藤井 大介 大田原ツーリズム代表取締役社長

そもそも、アフターコロナは何かと問われると、私としては本来の娯楽が崩れた社会でしかない。インパクトが強く残るような体験ができる施設は存続する一方で、中途半端な施設は消えてしまう。しかし本来、遊びはそんな中途半端に見えるものが実は楽しいのであり、ワクワク感を演出するものだが。

農泊は政府が推し進める政策の一環で生まれたが、日本のグリーンツーリズム市場がまだまだ発展途上だったため、欧州ではもう20年も前から盛んに行われていた。日本では、地方の観光が温泉を中心に形づくられており、それゆえ欧州のように農家でゆっくり過ごすスタイルが発達してこなかった。では、今後インバウンドが再開していくなかで、有望と目されるインバウンド市場を取り込む手法は何か。とりわけ、地方観光でキーになることは何だろうか。

アフターコロナに限らず、コロナ前から課題となっているのは、訪日旅行のリピーター対策である。最初はゴールデンルートを訪れ、次第に地方へ赴く。そこでレンタカー、ディープ、リアル（本物）といった要素が求められていく。キーとなるのはリアルだ。リアルをつくり出すために重要な要素は、ありのままの日本を見せるということではなく、人と人との交流をつくり、人間関係をつくり出すことである。どんな地域でも交流をつくり出すことで旅行者に大きな影響を与えることはできる。これからの

勝ち技は、客を囲い込むような圧倒的に充実した施設を提供するか、それとも人とのリアルな交流をつくり出すかだ。

もう1つ、日本人が国内で移動する感覚と、訪日旅行者の感覚は全く違うことを理解することである。訪日客は多くのケースにおいて日本での滞在時間が長期になる。日本人も海外旅行に1泊2日で行くことはまれだろう。ましてや日本は島国で陸続きの国のように車で国境を越えられる場所ではない。そもそも地方では外国人が長期滞在しないといわれてきた。東京には長居するが、北関東では日帰りも多い。当たり前である。家族4人で関東に1週間いるとしたら、スーツケースを4つもぶら下げて地方に1泊しに行くことは考えられない。私なら東京に1週間滞在できるマンションを借り、荷物を置いて日帰りで地方に行く。子供もいる家族にとって、バスや車もなく荷物を持って宿泊先を毎日変えるなど、疲労でしかない。

## 発展する農泊の市場

立ち返れば、日本の観光業界はプロモーションに捉われすぎた。団体旅行の時代が終わり、個人旅行への移行、OTAの台頭、インバウンドの加速が進んだ。しかし何が変わったかといえば、プロモーションや売り方ばかりで、ハードやコンテンツが置

き換わっていない。それでは人々のニーズについていけない。

キーの1つ目であるリアルをつくり出す場として、農泊はうってつけだ。地域の人々との交流が作りやすい。

農泊といってもいくつかの宿泊形態があり、国内では農家が運営するものでは教育旅行用の農家民宿が主だ。しかし、一部で個人旅行を受け入れるホテルの運営が始まっている。いわゆるアグリツーリズムの世界感だ。ちなみに、栃木県大田原市は国内のアグリツーリズムのメッカになるよう数年前から取り組んでおり、来年春から順次、地元農家がホテルを開業する計画がある。アグリツーリズムでは、農家民宿では得られなかったプライベート空間を持ちつつ、農家との交流、農業と農村のリアルを家族で楽しめる。国内外のファミリー層にとっては圧倒的な魅力となる。

また、農泊の中には古民家を活用する手法もある。古民家なので町に点在する分散型となりやすく、イタリアのアルベルゴ・ディフーズをモチーフとして、地域内で土産や体験の提供など各機能の連携を進めることも多い。ただ、アルベルゴ・ディフーズはイタリアでうまくいっているかと問われれば、アグリツーリズムの方が圧倒的に成功している。個性豊かなイタリア人より、むしろ組織化を得意とする日本人の方がうまく機能させる可能性を秘める。いずれにせよ、その理論は素晴らしく、古民家等による町一体型ホテルは日本の地方都市や集落に未来を開く。うまくコーディネートしていくことにより、ディープでそこにしかない体験を提供することが可能だ。

その具現化に向け、当社は19年、大田原市に隣接する那珂川町のど真ん中で有形文化財を大改修して「飯塚邸」をオープンした。宿泊以外の機能は町の中に求める、まさに町一体型ホテルである。DMOである当社が得意とする地元ならではの交流や体験を提供し、オンライン旅行予約サイトなどで高評価をいただくようになった。その理由は単純で、顔が互いに見える関係づくりを構築してリアルな体験を提供しているからだ。



日本のリアルのライフスタイルを提供するため、大田原ツーリズムが開業した町一体型ホテルの飯塚邸。長期滞在でも疲れがたまらない造り

## 長期滞在の手法

2つ目のキーである地方での訪日客の長期滞在には、アパートメントスタイルの部屋に解決を求めることができる。そもそも欧州は地方での長期滞在が主流で、自然が多く景観の良い農家が営むホテルで1週間ほど過ごす。1週間単位でない貸し出さないホテルもあり、部屋はリビングやキッチン付きのアパートメントスタイルが主流だ。なぜなら、1週間もベッドルームだけで過ごすのは疲れがたまり、ストレスをためない設備や部屋が必要となる。

飯塚邸ではアパートメントスタイルの部屋づくりを行った。それによりコロナ前から、成田空港からレンタカーで直接訪れ、1週間宿泊するファミリーの利用があった。もちろん、拠点型観光として、飯塚邸をベースにレンタカーで遠くは片道3時間の観光地まで遊びに行く日もあれば、ホテルで1日ゆっくりする日もある。長期滞在する外国人にとって重要なことは、ストレスフリーで快適に過ごせる空間と、こもることも可能な選べる過ごし方だ。

これからの世界、農泊は相当な可能性を秘めている。ただし、ハードもソフトもどこまで欧州のようなレベルの品質のものがつくれるかは、その地域の努力にかかっている。



## Profile

ふじい だいすけ ●09年ファーム・アンド・ファーム・カンパニー設立。経営支援、「下野農園」惣菜・飲食事業を展開。12年に大田原市と合弁で大田原ツーリズム設立。2年連続重点支援DMO。180軒の農家民泊を中心とした農村観光の企画・造成や「飯塚邸」運営。